

自由思想

第94号・2003(平成15)年12月

第24回「石橋湛山賞」特集

受賞記念講演

地域再生の経済学

神野直彦氏の人と業績

——リベリズムの立場に立った真の意味における経済学者

神野 直彦
宇沢 弘文

追悼・石橋湛一(前)理事長

石橋湛一さんを偲ぶ

新しく理事長に就任して

中井 義行
石橋 省三

再論「戦略的円安」のすすめ

幻と希望の轍

——石橋湛山と矢内原忠雄における平和思想の比較考察(上)

神尾 昭男
井坂 康志

新刊紹介

川越良明著『横手時代の石橋湛山』／ロシア語版『湛山回想』

論壇季評

二大政党時代の幕開け／来夏の参院選挙が試金石／橋本改革の二の舞い？／第三の道を説く佐和の構造改革論／地方分権の正道を示す／今日に通じる湛山の地方自治論／日米で問われるマスメディアの大義／イラクめぐる朝日と読売／「モラトリウム世代」から「サル化社会」へ？

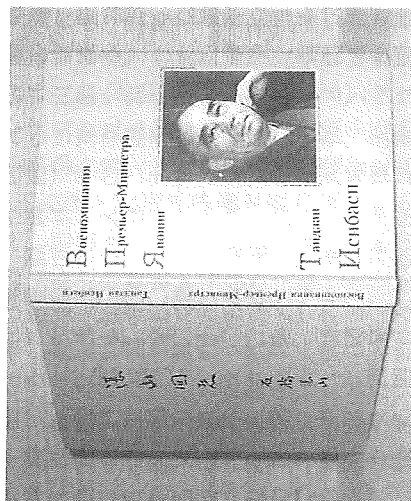
財団法人

石橋湛山記念財団

号)と、ロシア革命政府の早期承認を主張している。

もちろん湛山は社会主義者でもなければ、(前記、自分で述べているような)過激な革命思想への共感者でもなかったが、これらの論評は、世界の流れ、ロシアの現実、革命の必然性、独逸講和の蓋然性を見極め、日本のシベリア出兵の無謀性を見抜いていた、湛山のリベラリズムの真骨頂を示したもののといえよう。

ロシア語版の序文にあるとおり、湛山はまた、第二次大戦後における「日本とソ連、および日本とロシアの友好運動のバイオニア」であった。五七年、病いに倒れて組閣したばかりの石橋内閣から退いたあとも、対ソ連、対中国との友好・平和運動に情熱を注いでいた。五九年には訪中して周恩来総理に「日中米ソ平和同盟」構想を打診し、六一年にはその「日中米ソ平和同盟」案を発表している。六〇年代初めには「日ソ協会」(一九五七年結成)の第二



代会長に就任して、両国間の関係改善、友好促進、経済交流に尽力した。言論ばかりではなく、政治的にも国際的にも行動の人であった。

このような戦前戦後を通じた、ソ連社会主義体制への理解、軍国的大日本主義への抵抗、ソ連・中国を含めた国際平和体制の模索に情熱を燃やし続けた湛山の一書、ロシア語での刊行は、ある意味で遅すぎたともいえよう。

ソ連と東欧の社会主義体制が崩壊して一〇年あまり、ロシアではエリツィン政権の下での社会経済の混乱の中で、一時は自虐的ともいえるほどの自信喪失状態に陥っていたが、プーチン政権誕生以来、次第に自信を取り戻し、新たな建国に取り組んでいる。また、ソ連崩壊に伴って独立した中央アジアをはじめとする旧連邦構成共和国も、連邦体制の枠組みを外れて、新しい歩みを始めている。そうした中、『湛山回想』がロシア人の間で、またロシア語を読むことができる人々の間で、広く読まれるようになることを期待したい。

このロシア語版の出版にあたっては、日本ユーラシア協会(九二年、日ソ協会から改称)の方々の甚大な協力があり、国際交流基金の翻訳助成対象図書として援助を受けている。

なお、『湛山回想』とともに、同じ岩波文庫に収録されている『石橋湛山評論集』(松尾尊允編、八四年刊)も、ロシア語翻訳の計画があるという。

幻と希望の轍

——石橋湛山と矢内原忠雄における平和思想の比較考察(上)——

東洋経済新報社出版局

井坂康志

公義をはとばしる水のように、正義を尽きない川のように流れさせよ(『アモス書』第五章二四節)

はじめに

◆アウトサイダーたちの見た幻

「元来アウトサイダーとは異教の徒のことであり、正確には弓を引くものの謂である。……私のアウトサイダーの定義はと問われれば、それは『幻を見る人』という漠然とした一語を用意しているだけである」

河上徹太郎は『日本のアウトサイダー』のなかで右のように述べている。河上は本書で近代日本のアウトサイダーの系譜をたどると同時に、日本におけるその概念規定がキリスト教を軸とした位相の違いにより、欧米のそれと質的に異なる点を明らかにしている。つまり、欧米のアウトサイダーとは、その字義からも「異教徒」(＝キリスト教徒でない)であるのに対し、元来異教である日本においては欧米のような対立

概念で説明することができず、きわめて複雑かつ逆説的な様相を呈しているためである。

ここから河上は、とりわけ内村鑑三(一八六一―一九三〇年)を日本のアウトサイダーの「最も典型的な存在」と目していた。内村は日本という異教の国にキリスト教の根を据えたと同時に、「正統な」キリスト教会や国家主義に弓を引き、生涯戦闘的姿勢を崩さなかった人物でもある。ここで興味深いのは、内村自身、不敬事件に象徴されるように既成の権威に対してあくまでも敵対的であつたにもかかわらず、結果として彼が日本を代表するキリスト者と認められている点にある。この逆説性が日本におけるアウトサイダーを説明する鍵と考えることができるだろう。ここにおいて、内村自身が近代日本における代表的アウトサイダーであつたと同時に、「代表的日本人」であつたともいえるのである。

◆暗闇で共有された幻

河上徹太郎によるアウトサイダーの定義に倣えば、石橋湛山（一八八四―一九七三年）と矢内原忠雄（一八九三―一九六二年）は間違いなく内村鑑三の系譜に属する人物であろう。

「幻を見る」とは、時代の指し示す方向性、本来あるべき世界や人間の理想型を直覚することにはかならない。ここではより明確にするために、「幻を見る」とは次の二つの条件、①時流の波に押し流されず、未来に対する透徹した洞察力、構想力を持ち、それによって人々に進むべき道を指し示すこと、②日本人としての基礎に立ちながら、世界で通用する独自の論理を構築すること、を合わせ持つものとする。

この「幻を見る」とは『旧約聖書』における預言者がしばしば幻を通じて真理を獲得する過程に酷似している。預言者とは、神から示された真理を主体的に受けとめ、それを自らの経験を通じ、その時代にふさわしい言葉で述べる存在である。いわば真理のラウド・スピーカーである。この意味では両者ともに近代日本のアウトサイダーであったとともに、預言者としての性格をも色濃く帯びていたということができよう。

預言者的性格とは石橋、矢内原の壮絶な人生を思い起こせば容易に首肯しうるところとなるであろう。すなわち、両者における戦時下の抵抗に見られるように、世の指弾を恐れず文字どおり命懸けで自国を批判・断罪した点においてこのことが顕著に認められる。また、敗戦後新たな時代の到来を宣

石橋、矢内原ともに明治・大正・昭和とほぼ同時代を生きた人物であったが、筆者の知りうる限り両者の物理的・精神的交流はなかったようである。しかし、彼等の思想・行動様式には共通するいくつかの特質があったと考えられる。特に注目されるものとして以下の点がある。

- ① 実践的な経済問題の討究を主たる活動領域としていたこと。
- ② 人格形成の時期に宗教との深い関わりを持ち、生涯宗教者であったこと。
- ③ ①、②から独自の平和思想を導き出し、かつそれを実践的行動原理としたこと。
- ④ 雑誌等を通じて自己の思想を積極的に社会に発信していたこと。

これらはいずれも相互に深い関係性を有しているが、ここで特に重視したいのは、両者の平和思想およびその宗教的基礎である。通常、近代史において石橋と矢内原が並列的に論じられる機会は稀である。数少ない例外として、反戦論・平和論の体系から両者を一つの水脈のなかで位置付ける作業が行われている。ここでは太平洋戦争期を中心として活動した言論人・研究者としての視点から評価がなされているが、その思想・宗教的視角から扱ったものは筆者の知りうる限りではほとんどないように見える。

いささか前置きが長くなったが、石橋、矢内原に共有された平和思想およびその宗教的基礎を確認するために、はじめに以下の第一、二節では、石橋と矢内原の生涯をキリスト教

言し、自らリーダーとして絶望の淵にあった日本人を励まし、希望を与えた点においても同様である。

◆見えざる絆

この小論は石橋、矢内原が見たであろうそれぞれの幻に、共通する特質を見出そうとするものである。このことを通じて、彼等が幻の遙か彼方に仰ぎ見ていた「確かな存在」を多少なりとも明らかにできればと思う。

当然ながら、個人が果たす歴史における役割は単に個々の人格、性格といった属人的要素のみに還元されるものではない。また、本来人格とはさまざまな価値観や思想の相互作用による複合体であって、特定の宗教的基礎のみで一義的な説明が可能とは考えられない。しかし、石橋と矢内原においては、後に述べるように直接的な交流が認められなかったにもかかわらず、戦前・戦中・戦後の行動様式においてきわめて同質的な行動原理をはからずも共有していた。これは特定の時代状況における石橋、矢内原をつなぐ共通の精神的基調が、両者の行動を内面から突き動かしていたためと考えられる。その背後には両者がともに揺るぐことなく仰ぎ見ていたであろう「何か」、換言すれば、暗闇のうちに共有された幻の存在が仮定されてしかるべきではないかと考えるのである。

ここでは幻が共有された根拠の一端を両者の宗教観（特にキリスト教、日蓮宗）に求め、これらと関わりを持つそれぞれの言論・研究の成果によって、両者の時代精神と宗教思想との関係を傍証していきたいと考える。

による基礎的視角を通して見ていくこととする。具体的には、①人格形成、②宗教における特質、③戦前・戦中における実践活動、④戦後における将来展望の順で検討を行う。そして本論（上）の最後に「小括」として両者の思想と実践の整理を行う。ここで得られた視点をもとに、（下）では石橋、矢内原の日蓮論、日本人観に共通する特徴を明らかとし、結論として共有された幻やそれにもとづく平和思想の特質、およびその現代的意義を導出したいと考える。

一 石橋湛山における希望の原理

◆大島正健とクラークの思想

最初に比較の視座を得るために、石橋のキリスト教観を確認したい。

『湛山回想』によれば、彼が意識的に受けたキリスト教的感化は、甲府中学に入学した一一歳のときに遡る。彼は人格形成に大きな影響を与えた人物として同校校長であった大島正健を特筆する。石橋は大島を通じて、札幌農学校の開拓者精神やクラークの人格について聞く機会を得た。石橋は大島を次のように描写している。

「大島校長は、札幌農学校の第一回卒業生で、有名なウィリアム・クラーク博士の直接の薫陶を受けた人であつた。……また札幌で、初めての教会を作り、その牧師を勤めたという、熱心なキリスト教徒でもあつた。しかし同時に、からだこそ小さかつたが、物にこだわらず、意気の盛んな、豪傑はだの人であつた」

大島は開校と同時に札幌農学校に入学した第一期生であった。つまり、彼はクラークの警咳に接した数少ない日本人の一人であったことになる。付言するならば、一年遅れで同校に入学した内村鑑三や新渡戸稲造はクラークが帰国した直後であったため、札幌で直接会うことはなかった。札幌農学校の第一期生は一六名であるが、その一人が大島であった。大島は仲間から「ミッシヨナリー・モンク」(修道僧)と呼ばれる生真面目な性格の持ち主であり、後に内村鑑三と独立教会の創生に尽力し、教師・牧師として活動している。

当時、辺境の地・札幌で行われたクラークという一外国人による教育——しかもそれは一年に満たなかった——は、一教育機関の持ちうる社会的影響力をはるかに超えたものであった。さらにその間接的影響力をも考えるならば、きわめて大きな歴史的意義を認めることができる。事実、石橋は大島から聞いたクラークという人物によって、「一生を支配する影響を受けた」と告白している。

◆継承された大志

クラークはアメリカのアマスト大学出身の農学者であり、農民の子弟を教育するために設立されたマサチューセッツ州立農科大学の初代学長でもあった。クラークが札幌農学校で行った教育原理は、生徒の強い性格形成を目標としていた。クラークはすべての規則を廃止し、「紳士であれ」(Be Gentlemen)という言葉でその代わりとしたが、後に有名となるこの金言はピューリタンの厳格さで強要されたという。ク

後述する矢内原忠雄はその人格形成において新渡戸稲造、内村鑑三の精神を受け継ぎ、自らを「札幌の子」と呼んでいる。石橋も上記の理由から、その間接的影響の深さを考えるならば、「札幌の子」と呼ぶことができるかもしれない。

◆有髪の僧

大島を通じて得たクラークの教えは石橋の人格形成に大きな影響を及ぼした。もちろんよく知られるように、石橋自身の出自は日蓮宗である。父・杉田湛誓は日蓮宗の僧侶であり、総本山身延山久遠寺第八一代法主に選ばれた俊英であった。また、石橋自身も日蓮宗の僧として望月日謙(同第八三代法主)に預けられ、人格的にきわめて深い薫陶を受けている。しかし、彼の生まれ育った環境は、『回想』に見るようにきわめて開明的かつ自由主義的であり、他の宗教をも受け入れる豊かな土壌があったことが窺われる。彼は自らの父や影響を受けた人を次のように回顧する。

「私は本来、宗教家になるべきはずの境遇に育ったものである。もともと父も、望月師匠も、寺に成長したものは、必ず坊主になるべきだなどという窮屈な考えを持った人ではなかった」

このような自由な気風のなかで育まれた石橋の宗教理解には独特なものがあつた。石橋は自身宗教に対して寛容であつたけれども、同時に彼にはきわめて強烈な宗教家としての「精神的構え」が確立されていたのである。これは石橋の生涯に特徴的に見られる精神的基調を形成したと考えるもよい

であろう。クラークは若い学生たちの人格形成に配慮して、大志を持つことをあらゆる行動の動機とするよう勧めた。また、ただ偉大な人物だけが偉大な国家を作ることができ、そのような人物は完全なピューリタンのキリスト教の実践を通してのみ形成されると説いた。つまり、ここにおいて「人」となることは、同時にキリスト者となり、社会改革家となることを意味した。このようなクラークによるピューリタンの精神は、「少年よ、大志を抱け」という一語に集約される。この言葉が日本における近代国家形成に重要な役割を果たしたことは明らかであろう。

大島正健を通じて得るにいたつたクラークの卓越した生活態度、世界観が、この時期の石橋の精神に深く刻印されたことは想像に難くない。石橋自身、クラークのキリスト教思想、民主主義思想の実践に触れ、剛健な開拓者精神に打たれたことを率直に記している。

「大島校長を通じ、クラーク博士のことを知り、これだ、強く感じたのである。つまりわたしもクラーク博士になりたいと思つたのである」(傍点筆者)

彼に「これだ」と思わしめたこの直観は、後の幻形成に大きく寄与することとなる。石橋は「クラーク博士になりたい」と述べているように、自らの精神をクラークの人格的特徴に同化させることで、自己陶冶をはかった。石橋にとってクラークは単なる憧憬の対象のみならず、現実的な人生目標、あるいは到達すべき理想的モデルとして受け入れられたのである。石橋は生涯、書齋にクラークの写真を掲げていたという。

であろう。石橋は、東洋経済新報社に入社したいきさつを次のように語っている。

「私は、もともと宗教家として働くつもりで、ために学校でも哲学科を選んだ。……私は今でも有髪の僧のつもりであつて、職業は別に求めたとはいへ、宗教家たるの志は、いまだこれを捨てたことはない」

「有髪の僧」とは石橋の生活態度を考えるうえで、本質を直截的に表現するものであろう。通常の宗教者が内部の精神的領域に深く沈潜していく傾向があるのに対し、石橋は反対に宗教的真理を通じて現実問題の討究に熱意を燃やすためである。

換言すれば、石橋の実践活動のいかなる局面においても、キリスト教や仏教からの真理をその精神の深みにおいて積極的に受けとめ、揺らぐことのない判断基準を築いていたといふことができる。

このことを姜克實は「現世からの超俗と逆に、プラグマティズムの『人生中心』の世界観をモットーとしていた特異な存在」と評価している。また、同様のことについて、長幸男が簡潔に次のように述べるのは印象的である。

「湛山の操志の倫理的一貫性は……宗教心によつて支えられていたが、その『最高価値』の把握の故に、すべての現世的諸価値・論議を相対化し、思考の開放性・発展性・弾力性を身につけることができた」

この精神的構えは、後述する矢内原忠雄による真理追究の実践性と比較した場合、高い近似性を有する点で注目し値す

る。

事実、石橋は生涯の実践活動において、キリスト教からの宗教的影響を色濃く受けた言動をとっていた。新宿区中落合の自宅の玄関には、自ら書した『マタイ伝』からの引用をレリーフとして掲げていた。また、自らの心構えを語る際や周囲を激励する際に、「明日を思い煩うな」といった『聖書』からの引用をしばしば行っている。

戦前に東洋経済の社員が社会主義者として特高警察に逮捕されたときも、その社員を退社させず、「一頭の迷える羊を見出す喜びは残りの九九頭の羊を得る喜びに劣らない」と述べてかばったという。

また、『日蓮遺文集』と並ぶ石橋の枕頭の書が『聖書』であったことも、その影響の深さを窺わせる。石橋の最晩年において、聖路加国際病院に入院中も、キリスト教の礼拝を欠かすことがなかった。これらは石橋の宗教精神をよく表すものといえるであろう。

論説においてもその一端を見ることは十分可能である。『東洋時論』において「キリストは神の国に入る方法として今日主義を教えた。明日は明日のこととせよと説いた。之は偉大な道徳だ」と述べているのは一例に過ぎないが、生前のエピソードのいくつかを見ただけでも、彼がキリスト教道徳を自らの実践原理として精神のきわめて深い部分で受け入れていたことを理解することができよう。

価値追求を迫るものとした。人生についての一定の洞察を持つならば、無抵抗主義も決して非現実的とはいえない、と石橋は主張する。

石橋はさらに次のように述べる。

「平和は人類の希望である。否、常に希望であるばかりではなく、平和は正に古来の人生の基礎であつた。然らば則ち、取るに足らぬ小問題のために反目嫉視し、此の大なる希望と、人生の基礎を破壊するは、悲しむべきことではないか」

石橋は、平和を人類史の基礎として位置付けただけで、『福音書』を引用し、キリストの思想が生活全体を考慮に入れた実践原理を提供することを示唆している。同時に、人が争うことを否定する態度も、キリスト教平和主義の当然の帰結として認めたうえで、人類の根本要求と一致するものであるとしている。ここに石橋における平和主義の基礎を見ることができよう。

石橋の名論文「一切を棄つるの覚悟」においても、平和への確信に満ちた姿勢はいつそう先鋭化して表れている。石橋は大正期先進国間で行われた軍縮会議に後ろ向きな政府を次のように批判する。

「しかし、何もかも棄てて掛るのだ。これが一番の、而して唯一の道である。……何もかも棄てて掛るの覚悟、小欲を去って、大欲に就くのが聡明があつたならば、吾輩はまず第一に、我が国から進んで軍備縮小会議を提起し得たはずだと思ふ」

◆小欲にとらわれず大欲に生きる

さらに石橋はキリスト教を実践道徳のみならず、一生を懸けた人生観にまで昇華させていった。彼の非戦・平和論に関する一連の言説がこのことを証している。

石橋は彼の舌鋒が急激に鋭さを増す大正初期の論説で、次のように述べる。

「キリストは『人なんじの右の頬を打たば、亦ほかの頬も転らして之れに向けよ』と云うた。世の人は、之れを称してキリストの無抵抗主義と呼び、事実、に於いて人類の、會つて行いたることも無く、また今後行はるべき望みも無き空想として排斥して居る。併し僕を以て見るに、此の言葉は、果して世の人の称する如く、爾かく無価値のものであろうか、却つて之れを無価値なりと排斥する人々の方が、人生の根本にも撤せず、彼等自らの欲求の何ものなるかを省察する能力も無き、無価値の人間ではなからうかと思ふ」

この論説は、「戦争謳歌論を排す」と題されており、当時横溢していた無思慮な戦争礼讃に反対するものである。趣旨を要約すれば、①戦争が人類生活の目的でも必然でもないこと、②戦争は人類に対して利益を与えないこと、③戦争は今後文明社会が進化するにともない減少して行くであろうことを論証することにあつた。

ここには理想を軽んずる世間の態度への痛烈な批判も読みとることができる。石橋にとつて、平和は常に現実問題であつた。平和こそが「人生の根本」へ通じ、われわれに究極の

石橋はこの論説において、小欲を棄てて大欲を持つべきだと力説する。ここでいう「大欲」とは、別の個所で「我が国の総ての禍根は、しばしば述べるが如く、小欲にとらわれていることだ、志の小さいことだ」(傍点筆者)と石橋が説明するように、「大志」と同義であることがわかる。つまり、石橋は「日本人よ、大志を抱け」といつたことになる。このことは、石橋が自らの理想と捉えたウィリアム・クラークの人生観を彷彿とさせ、命脈の深さを窺わせる。強調されてよい点であろう。

石橋はこの論説を次のように締めくくる。

「吾輩の説に対して、あるいは空想呼ばわりする人があるかもしれぬ。小欲に囚われること深き者には、必ずさような疑念が起るに相違ない。……キリスト曰く、『何を食ひ、何を飲み、何を着んとて思い煩うなかれ、汝らまず神の国とその義とを求めよ、しからばこれらのものは皆、汝らに加えらるべし』と」

石橋は植民地放棄を決して空想や妄想の類と見なさなかつた。むしろ、そうすることで日本は国際的により有利な地位を築けるとさえ考えた。なぜなら、日本を除く他国は「日本にのみかくの如き自由主義を採られては、世界におけるその道徳的位置を保つを得ぬにいたる」ためである。石橋はこの提案を「身を棄ててこそ、浮かむ瀬もあれ」と要約するが、この心情はキリストの「一粒の麦」の精神にも相通じるものがあつたであろう。また、結論として石橋の座右の銘であり、周囲にも話したという力ある言葉で結んでいるところは、繰

り返すように、石橋のキリスト教性を強く印象付けるものであろう。石橋にあってキリスト教の真理が単なる題目ではなく、彼の精神に血肉化し躍動するほどまでに消化されていたことが理解される。

◆希望の預言——世界平和の戦士へ

東洋経済における石橋の先輩であった三浦鉄太郎は、日米戦争の開戦当初から、「日本は敗ける、しかし日本は敗戦すれば助かる、もし勝てば滅びる」と語ったという。このような当時にしてみれば「破天荒」きわまりない思想は、石橋をはじめとする東洋経済の一部の社員には共有されていたようではあるが、多くは懐疑的であった。石橋は軍部への迎合と日和見主義を次のように痛撃する⁽¹⁾。

「東洋経済新報には伝統もあり、主義もある。その伝統も、主義も捨て、いわゆる軍部に迎合し、ただ東洋経済新報の形だけを残したとて、無意味である。そんな醜態を演ずるなら、いっそ自爆して滅びた方が、はるかに世のためにもなり、雑誌社の先輩の意思にもかなうことであらう。私はこういう信念のもとに、あえて、がんばり、内外の圧迫に屈しなかった」

この時期、石橋は国家という外なる敵と東洋経済における内なる敵との狭み打ちに合っていた。当時の石橋による激烈な批判——自らを育てた東洋経済および国家政策への不信の念——が同一基調で貫かれているのは当然である。先の引用中の「東洋経済新報」を「日本」と読み替えても、まったく

違和感はない。石橋にとっては、東洋経済や日本を愛する以上に、真理を愛するほうがはるかにまさったのである。

筆者が東洋経済の大先輩から聞いた逸話である。石橋は言論統制の厳しい戦中末期にあつて、伊勢神宮を訪れ深く祈っていた。同行した社員が何を祈っていたのかと訊いたところ、「一日も早く日本がこの戦争に負けることを祈っていた」と答えたという。かくして軍国日本は石橋が見た幻⁽²⁾どおり、悲惨な末路を迎えることとなる。

しかし、石橋の幻⁽³⁾は、戦後においても確かな一貫性を保った。帝国主義の拡大に対して鋭い批判を行った石橋は、敗戦日本の将来に限りない発展の可能性を見たのである。戦前日本を覆っていた軍部、財閥等の暗黒が一掃され、自由主義、民主主義の開花が必然の運命と石橋の目には映ったに違いない。彼の見た幻⁽⁴⁾は次のような祝辞として誌上に表れた⁽⁵⁾。

「言うまでもなく日本国民は将来の戦争を望むものではない。それどころか今後の日本は世界平和の戦士としてその全力を尽くさなければならぬ。ここにこそ更生日本の使命はあり、またかくてこそ偉大なる更生日本は建設されるであらう」

石橋の発言としてしばしば引用される「更生日本の門出——前途は実に洋々たり」の結論である。卓抜した構想力というほかはない。「更生日本」とは文字どおり、一度死んで生まれ変わった日本である。死んだがゆえに、大きな実を結ばうとする日本である。筆者はこの論説に石橋の祈りに似た感情すらも感じる。

矢内原の思想形成を考えるにあたって、内村鑑三と新渡戸稲造の存在を避けて通ることはできない。矢内原は後年、『余の尊敬する人物』を出版し、自らの精神形成の軌跡を明らかにした。本書ではエレミヤ、日蓮、リンカーン、新渡戸稲造を、その続編でイザヤ、パウロ、ルター、クロムウェル、内村鑑三を、矢内原に最大の影響力を持った人物として取り上げている。これら九人の人物のうち、日蓮、新渡戸、内村が日本人であるが、同時代に直接的な薫陶を与えたのは新渡戸と内村の二人である。

新渡戸は矢内原が第一高等学校在学中の校長であり、内村はほぼ同じ頃入門した無教会キリスト教の指導者であった。矢内原自身「内村鑑三と新渡戸稲造とは私の二人の恩師で、内村先生よりは神を、新渡戸先生よりは人を学びました」と明記していることから、影響力の深さが窺われる。

内村と新渡戸は第一節でも述べたように、札幌農学校の第二期生にあたり、石橋に大きな影響を与えた大島正健の一年後輩にあたる。彼等の札幌農学校における交流は、内村の回心の書としても有名な『余は如何にして基督信徒となりし乎』からも知ることができる。三人の精神的交流は生涯続き、さまざまな領域において実を結ぶが、矢内原は彼等の関係性のなかから生まれ出た傑物ともいえるだろう。札幌農学校出身者たちによる集合体は通称「札幌バンド」と呼ばれる。札幌バンドの精神的基調はクラークのそれと同義である。矢内原自身、新渡戸、内村の直接的薫陶を重く見つつも、そこに深く焼き付けられたクラークの思想を見出している。矢内原

石橋は日本の使命を「世界平和の戦士」として全力を尽くすべきことと、「科学的精神」に徹することに見出した。暗黒のなかで見た幻⁽⁶⁾が現実的な一歩を踏み出したのであった。

戦後日本の新体制は、石橋が戦前より主張してきた非戦・平和の原理と矛盾するものではなかった。事実、石橋は新憲法第九条「戦争放棄」の規定を最も高く評価していたという。このことは石橋の持つにいたった幻⁽⁷⁾の確かな一貫性・連続性を明確に示したと同時に、石橋が暗黒のなかで見た幻⁽⁸⁾が、三〇年あまりの歳月を経て成就したものともいえるだろう。

二 矢内原忠雄における独立の精神

◆札幌の子

次に石橋湛山との比較において、矢内原忠雄の平和思想およびそのキリスト教的基礎を確認していきたいと思う。その際、随時石橋との比較において、両者の同質性・近似性を見出していくこととしたい。

矢内原忠雄は「矢内原事件」で知られる経済学者である。矢内原の生涯における主活動は大きく二つに分けて考えることができる。一つは、経済学者としての職業活動であり、『植民及植民政策』以下世に問うた一群の研究がその成果である。なかでも『帝国主義下の台湾』は矢内原の代表作として知られ、詳細な現地調査の結果、帝国主義的植民政策の罪の姿を明確に捉えた金字塔としての位置付けをなす。今一つは、無教会主義キリスト者としての活動である。このことについては後に詳述することとしたい。

は次のように述べる^⑩。

「(恩師たちの)非凡の見識と手腕は、今にして思へばことごとく札幌農学校に於けるクラーク博士の遺風を継いだものに外ならない。……私の恩師といふべき者は、ことごとく札幌農学校第二期の同級生から出て居る。かく思へば私も亦札幌の子と言はざるを得ないのである」

クラークの遺産が、札幌農学校を通して近代精神発現の過程で着実に継承された状況を見ることができよう。矢内原が自らを「札幌の子」と呼んだのもこのためである。さらに二人の師について考察を進めよう。

矢内原が新渡戸から受けた重要な教育とは、「縦の関係と横の関係」という人生における心構えであった。前者は宗教生活を、後者は社会的関係を指すが、このことを矢内原は次のように説明する。

「世の中には人に譲ってもよいことがたくさんある。広い心で譲るだけ譲るのが、社会生活に平和あらしめる道である。しかし又どうしても譲れないといふ点がある。それを守るのが独立である」

つまり、譲ることに徹するのが社会的関係(横の関係)であり、譲歩を拒否し独立を守るのが宗教生活(縦の関係)である。このような精神態度は矢内原の生涯を貫き、途切れることがなかった。彼は社会生活においては、思想を異にする人物とも快く交流を持った。学生時代には河合栄治郎を尊敬し、東京大学の職にあつては同僚のマルクス経済学者大内兵衛が無二の親友であつた^⑪。また「余の尊敬する人物」におい

て、日蓮を取り上げていることから同様のことは窺える。謙譲と独立の精神は新渡戸から得た生涯にわたる精神的遺産であつたということができよう。

さらにもう一人の師、内村鑑三は後の矢内原の活動にいつそう大きな影響力を持つ人物であつた。新渡戸が矢内原の人生における生活態度を提供したとすれば、内村はその実践的適用法をも提供したといえるかもしれない。このことは、とくに縦の関係であるキリスト者としての矢内原に明瞭に表れた。親友・大内兵衛は、矢内原における内村の影響をだいぶ後になつて次のように評価している。

「(矢内原は)私よりは少し年少であつたけれども、そのバックボーンが私自身の何倍も強かつた。私は彼等の骨を私の支柱としつつ、その強さがどこから来るのかをいぶかつた。多年の分析と分別によつて、彼等のヴァイタリチーまたはビタミンは、彼等が若かつたときに、内村という男が彼等に注ぎこんだものであることを、私は遂に発見した」

矢内原と親しく交流し相互の人格を知悉していただけでなく、戦時下の死闘におけるかけがえのない戦友でもあつたのが大内兵衛である。それゆえに、この言はきわめて大きな説得性を持つ。内村こそが矢内原の生涯にわたる人格的影響を保ち続けた人物であることが明確に理解されるであろう。石橋湛山の思想形成におけると同様に、青年期にめぐり会った人物からの影響が、後に人生の基底をなす世界観にまで昇華されていったのは興味深いところである。

本論の冒頭において河上徹太郎の言を引き、内村が近代日

本を代表するアウトサイダーであることを見た。内村の見た^⑫の幻^⑬は弟子の矢内原をも確実に捉えていた。つまり、矢内原の幻^⑬はすでに内村らによつて青年期に確立され、戦闘的人生への発芽を待っていたのである。ここで内村鑑三についてさらに述べておきたい。

矢内原が内村鑑三の門に入ることを許されたのは一九一一年、奇しくも石橋湛山が東洋経済に入社した年である。矢内原一九歳のときであつた。当時内村は嚴重な門戸閉鎖主義をとつて、少数の青年だけに聖書講義を行つていた。

矢内原は入門直後、衝撃的な事件に遭遇する。内村の愛娘ルツ子の死である。矢内原は次のように自らの印象を描写している。

「葬儀で先生が感懐を述べて、『これはルツ子の葬式ではない、結婚式である。彼女は天国へ嫁入つたのである』と言はれましたが、基督教に全く初心であつた私は、それまでにかかる言葉を聞いたことはかつてありませんでした。……柩が穴に下され、先生が一握の土をつかんだ手を高くさし上げて、『ルツ子さん万歳!』と呼ばれましたとき、私は雷に撃たれたように全身すくんでしまいました。『これはただごとではないぞ。基督教を信ずるといふことは生命がけのことだぞ』と私は思ひました」

内村の門を叩いたばかりの矢内原を襲つたこの印象は、生涯彼の脳裏から去ることがなかったという。厳肅きわまる葬儀のなかで発せられた内村の「復活」に対する確信がこの出来事に凝縮されていたためである。矢内原の「雷に撃たれ

た」ような経路は、若き日のルターの頭上に響いた霹靂と同様に彼の一生を決定づけることになる。内村によつて、矢内原はキリスト教信仰は、「命懸け」であり「真剣な生活態度」として叩き込まれた。キリスト教への確信は揺るぎないものとなつたのである。内村の復活の信仰を通じて得たことは、その後の彼の歩みを支える強い支柱となつた。

以降矢内原は学生時代はもちろん、卒業後も東京にいるときは欠かさず内村の聖書研究集會に列し、そして後には矢内原自身が毎月個人雑誌を出し、日曜ごとに少数の青年に聖書を講ずるという伝導方式を受け継いだのであつた。むしろ重要なのは形式を受け継いだことにあるのではない。その精神を受け継いだということである。

◆無教会主義の生成——教会の無い者の教会

内村鑑三によるキリスト教の形式は無教会主義といわれる。無教会主義とは、人は教会員とならなくてもキリスト者でありうるという主張を基礎としている。矢内原の整理に即してみると、無教会の特質を把握するために以下の三点が重要である^⑭。

第一に、異邦人の救いという点である。このことは日本人の心を持つてキリストを信じることをさす。第二に、人の救われるのは教会という制度によるのではなく、イエスを信じる信仰によるという福音主義である。第三に、政治権力や社会の道徳的腐敗・墮落を攻撃し、世を救うという預言者の精神である。

これらが内村の個人的来歴を色濃く反映していることは事実である。内村は欧米滞在中にキリスト教国が国力や文明を背景として積極的に対外侵略を進めていくのを見るに及び、不信感を次第に募らせていった。同時に内村は神と信者を媒介する教会や職業的宣教師は、信仰の純粋さを妨げるものとも見るようになる。また、国内においても一神教であるがゆえに、天皇への無条件な崇拜を要求する国体論とも衝突することとなる。有名な「内村鑑三不敬事件」である。

このように内村のキリスト者としての態度は国内・国外を問わず衝突を繰り返した。内村の当時の心中は、彼が『万朝報』の署名記事として執筆した次の一節からも見て取ることができる。

「正義を唱ふる者はある、然し正義を行ふ者はない、今や此日本国に於て正義を行ふ者があれば、彼は逆臣国賊の名を着せられて終に殺されて了ふ、東洋の君子国は今や正義の行はれざる国となった」

アウトサイダーの真骨頂ともいえる態度がここに完成を見る。内村は内外ともに見捨てられ、打ち砕かれた自らの境遇や苦難を通じて、先の特質を持つ独自のキリスト教を確立するにいたる。それが無教会主義であった。内村自身は無教会を次のように説明している。

「『無教会』は教会の無い者の教会であります、即ち家の無い者の合宿所とも云ふべきものであります、即ち心霊上の養育院か孤児院のやうなものであります。……金の無い者、親の無い者、家の無い者は皆な可憐な者ではありません乎」

の倫理的一貫性を保持し、すべての現世的諸価値を相対化することにより、暗黒の時代を闘い抜くことができたのである。

◆此の国を葬つて下さい

内村は近代日本における偉大かつ特異な非戦論者であった。日清戦争にあって主戦論の急先鋒であった内村は、一〇年後の日露戦争では、真つ先に非戦論を唱えた。当時『万朝報』の客員であった彼は、多くの非戦論を同紙上に発表し、開戦前の四カ月で主義に殉じて退社している。内村が同紙に執筆した「戦争廃止論」を引用しておこう。

「戦争の利益は其害毒を償ふに足りない。戦争の利益は強盗の利益である。是れは盗みし者の一時の利益であつて、(若し之をしも利益と称するを得ば、)彼と盗まれし者との永久の不利益である。盗みし者の道徳は之が為め墮落し、其結果として彼は終に彼が剣を抜いて盗み得しものよりも数層倍のものを以て彼の罪惡を償はざるを得ざるに至る。若し世に大愚の極と称すべきものがあれば、それは剣を以て国運の進歩を図らんとすることである」

内村はこのとき、非開戦論者であるばかりでなく、絶対的戦争廃止論者でもあった。戦争と平和の問題についてこそ、内村の精神を最もよく受け継いだのは矢内原であった。矢内原による発言は、主に個人雑誌によつて支えられていた。内村亡き後も、弟子たちによつてさまざまな個人雑誌が発刊され、戦前戦中の無教会キリスト者による一連の言論活動が形

無教会とは教会の無い者のための教会ということになる。ここから外国人によらず、また制度によらないキリスト教運動へと発展していく。また、無教会主義では政治や社会における現実性が重んじられ、職業生活こそが信仰を實踐する神聖な場であると捉えられた。この点も無教会主義の大きな特徴といえる。一九一七年の無教会名簿(相木教友)によると、農業、文房具商、家具商等を職業に持つ会員も多く見受けられる。矢内原自身も職業は大学教授であつた。当初より日々の職業的実践こそが信仰の場という無教会らしい会員構成となつていたことがわかる。

矢内原はこのような無教会主義にもとづくキリスト教を人格の土台に位置付け、独自の平和論を主唱することとなる。矢内原は、無教会主義を「再宗教改革」と認識し、これこそが内村の生涯における最大の日本への貢献と評価している。その理由を次のように述べている。

「(無教会主義によつて)基督教のゆき詰りを打破して、実社会のなかにその生命力を顕現してゆくべき原動力がここに得られたのであります」(傍点筆者)

無教会主義における実践性の尊重は、第一節で述べた石橋湛山の「有髮の僧」にきわめて近い考え方と評価することが可能である。石橋は言論機関に身を置き実践活動に精力的に進進しつつも、生涯宗教者としての志を失わなかった。

無教会においても、福音という揺らぐことのない最高価値を得さえすれば、その活動の場は自らの生活全般に見出されるはずだと考えられた。矢内原も究極の価値のために生涯そ

成されていった。矢内原にあつては、一九三二年発刊の伝導誌『通信』、それに続く『嘉信』が彼の一五年戦争における重要な武器として機能した。

一九三七年、いわゆる「矢内原事件」により戦闘は開始された。『中央公論』に発表した「国家の理想」において、彼は「正義とは人々が自己の尊厳を主張しつつ同時に他者の尊厳を擁護すること」であるとし、「抗敵の(原因を作り作る)抗敵を非難し、自国主権を強固にする為に、他国主権を(薄弱ならし)めようとするならば、……若しその事が『国家』の理想であるとすれば、国家なるものは正義の名に(値せざる動物)的・物質的な自然的存在(でしかあり)得ざる事となり、従つて国家自体(の崩壊)に帰着せざるを得ないのである」(一)内、伏せ字と国家を痛撃した。矢内原の主張は、正義と平和こそ国家の理想であり、理想を失った国家や民族は滅亡を免れないということに尽きる。

個人誌『通信』に掲載された「神の国」という講演録が大学教授としての矢内原に最後のとどめを刺した。矢内原は日本のキリスト者が戦争を批判しないばかりでなく、戦争遂行に協力していることにより、価値を失つたと痛罵している。矢内原は中国国民の抵抗にも与せず、「日本の国民」に向つて言ふべき言葉がある。汝等は速に戦を止めよ」と叫んだ。そして、講演を閉じるにあたり、次のように述べている。

「今日は、虚偽の世に於て、我々のかくも愛したる日本の国の理想、或は理想を失つたる日本の葬の席であります。私は怒ることも怒れません。泣くことも泣けません。どうぞ皆

さん、若し私の申したことが御解りになつたならば、日本の理想を生かす為に、一先づ此の国を葬つて下さい」

「国家の理想」は朗除、「通信」は発禁となり、矢内原は大から追われることになった。大内兵衛から経緯を聞いた矢内原は、柔和な態度で事実を受け入れたという。そして依願免官の辞令を受ける前、最終講義において次のように述べている。

「私は身体を減して魂を減すことの出来ない者を恐れない。私は誰をも恐れもしなければ、憎みも恨みもしない。但し身体ばかり肥って魂の瘦せた人間を軽蔑する」

矢内原の「喜びつつ苦難を耐え忍ぶ」強靱な精神性が痛いほどに伝わる言葉である。先の講演録では「理想を生かす為に、この国を葬る」という部分がきわめて重要である。矢内原は戦争放棄を決して空理空論とは考えなかった。むしろこの理想こそが、日本を生かす最善かつ現実の道と考えた。理想による国家社会を創るためには、一度軍国主義の現状を全否定しなければならなかった。日本を深く愛するほどにその必要があった。矢内原の理想とは平和国家建設への「大志」と言い換えてもよい。

これを石橋と照らし合わせれば、「小欲を棄てて、大欲に就く」「主義を棄てて軍部に迎合するなら、いつそ自爆して滅びたほうがはるかに世のためになる」となるであろう。石橋も日本の大志の不在を嘆き、戦中においては「負けたほうがこの国のためになる」との信念を持って闘った。戦時下抵抗の過程ではからずも、同趣旨の発言を行っていることは興

味深い事実といえる。

ここで両者の同質性を仮定しても、あなたがち不当な推測ではないと思う。田中彰は『小国主義』において、小国思想の近代日本における系譜を採っている。そのなかで、石橋や三浦の「植民地放棄」の論陣により開花する小国主義につき、内村鑑三の非戦論がその源流として位置付けられている。石橋と矢内原という、精神的基調を継承した「札幌の子」が同時期に同質性の高い行動原理を有したことについて、これを単なる偶然と割り切るほうが不自然であろう。筆者はこれらを持って、石橋と矢内原が仰ぎ見た幻が同源であり、きわめて近い発露の仕方をなだつたものと考えている。

◆慰めよ、我が民を慰めよ

矢内原が日本の無条件降伏を詔勅で聞いたとき、「とうとう終わった。これから平和の国を建てねばならない」という感慨に陥つたと記している。日本にとって敗戦を契機とする軍事国家から平和国家への転換は、コペルニクスの大転回であった。矢内原はこれを神からの偉大な啓示と受けとめて、「日本の使命」とすべきことを強調した。矢内原は戦時下の試練を生き抜いたキリスト者として、敗戦を神に対する義務、すなわち預言者イザヤのいう「末日の日」の問題として捉えた。

「信仰に於ては、永久平和は不可達成の理念ではなく、実現確実の希望である。……それは、永久平和の本質に出づる神自身の要求であり、神の意思により、神の力を以て実現せ

られることを信するのである」

このような矢内原の主張は絶対的平和論である。そして絶対的平和論が、戦時中の試練にあつて容易に挫折したのと好対照をなすものである。

矢内原は敗戦直後の論文「平和国家への道」で絶対的平和論への所信を明確に述べている。彼は、ここでも国家の理想は本来平和にあるべきだという積極的主張を展開し、このことは日本に特殊な問題ではなく、世界各国に共通する一般的な問題とする。日本が平和国家を確立するためには、その哲学を清め、その神観を高くする必要があると論じた。彼は明治維新以来の日本社会を次のように批判する。

「封建的な観念が近代的文化とそのまま不自然に結合せられ、その結果明治以来の跛行性、日本思想の独創力の喪失、科学思想の不発達、国民道德の形式化等が起つたのであり、之らの弊害はこのたびの戦争および敗戦によりて、子供の玩具箱をひつくりかへしたように、一度に国民の面前にぶちまけられたのである」

矢内原はこれまでの日本は西洋の文化、学問、思想、政治あらゆる面で、十分に発展させられなかったという。そして根因をキリスト教に対する冷淡無理解な態度に求めている。彼の敗戦理解を改めて石橋湛山のそれと比較すると、ここにも興味深い事実が見出されることがわかる。石橋は「哲学的日本」の建設を唱えるとともに、戦後における日本の使命を「世界平和の戦士」として全力を尽くすべきことと「科学的精神」に徹することに見出している。矢内原の「平和国家へ

の道」に見られるのも、要約すればほぼこの一点に集約することが可能であろう。

敗戦後の日本に大いなる希望を見出した点においても同様のことがいえる。矢内原は、日本は敗戦国として国家の理想に関する根本問題を多くの犠牲を払って学び、真剣に考える地位に置かれたと評価する。彼の信念は次の短い一文に遺憾なく表れているといえるだろう。

「敗戦日本の唯一の光栄を我らはここに見出すのである」

唯一の光栄とは、石橋がいうところの「世界平和の戦士」として全力を尽くし、「偉大なる更生日本」の建築にあることは明らかである。前者における卓抜した構想力をここに見ることができよう。

最後に、同論文に見る矢内原の新憲法観を確認して本論(上)の締めくくりとしたいと思う。矢内原は新憲法を高く評価したが、なかでも第九条「戦争放棄」の規定を最も評価している。彼は他の国が軍備を備えるなかにあつて日本の武装を行わず交戦権を放棄することを、「国家の運命を賭しての頗る大胆な行動」と賞賛する。また、戦争放棄は日本に潜在する戦争能力破壊の理論的結果であるにとどまらず、国際間の紛争解決を武力に訴える主権を引き渡すことについて、それ以上の価値を有するものと考えた。戦前戦中同様これを空想的理念ではなく、現実問題として見出している。矢内原は次のように述べて、賛意を明らかにしている。

「即ち日本が一方的になした交戦権の放棄を、世界の各国が同時的普遍的に為すことによつてのみ世界の平和は確立せ

	石橋湛山	矢内原忠雄
生没年	1884～1973年	1893～1962年
職業活動	ジャーナリスト (東洋経済新報社)	大学教授 (東京帝国大学経済学部)
青年時代の師	大島正健 (札幌農学校第一期生) 等	内村鑑三、 新渡戸稲造 (札幌農学校第二期生) 等
宗教観における特質	有髪の僧	無教会主義 (教会の無い者の教会)
戦時下の主張	満州放棄等 絶対的平和主義	台湾植民政策の批判等 絶対的平和主義
戦時中の姿勢	小欲を棄て、大欲に就く	理想なき国家は滅亡する
戦争末期の象徴的発言	主義を棄てるなら自爆して滅びた ほうがよい	理想を生かす為に、一先づ此の国 を葬つて下さい
敗戦後の象徴的発言	更生日本の門出——前途は実に 洋々たり	敗戦日本の唯一の光栄
戦後の要職	総理大臣	東京大学総長

- (4) 石橋湛山『湛山回想』岩波文庫、一九八五年、二八頁。
 (5) 小原信『内村鑑三の生涯』PHP文庫、一九九七年、一三七頁。
 (6) C・カルタローラ／田村光三他訳『内村鑑三と無教会』新教出版社、一九七八年、四七、四八頁。
 (7) 姜克實『石橋湛山』丸善ライブラリー、一九九四年、五頁。
 (8) 前掲『湛山回想』四〇三頁。
 (9) 姜克實『石橋湛山の思想史的研究』早稲田大学出版部、一九九二年、二〇頁。
 (10) 前掲『湛山回想』四〇五頁。
 (11) 『石橋湛山全集』(第一〇巻) 東洋経済新報社、一九七二年、四七四頁。
 (12) 『石橋湛山全集』(第一巻) 東洋経済新報社、一九七一年、三八三頁。
 (13) 石橋湛山『石橋湛山評論集』岩波文庫、一九八三年、九七、九九頁。
 (14) 前掲『湛山回想』二九一頁。
 (15) 前掲『石橋湛山評論集』二六〇頁。
 (16) 田中彰『小国主義』岩波新書、一九九九年、一五九頁。
 (17) 矢内原忠雄『余の尊敬する人物』岩波新書、一九四〇年。
 同『続余の尊敬する人物』岩波新書、一九四九年。
 (18) 前掲『余の尊敬する人物』一七九頁。
 (19) 『矢内原忠雄全集』(第二四巻) 岩波書店、一九六五年、六四三頁。
 (20) 矢内原伊作『矢内原忠雄伝』みすず書房、一九九八年を参照。
 (21) 鈴木俊郎編『回想の内村鑑三』岩波書店、一九五六年、四

られる。それによりて始めて世界諸国は日本の信頼に応へ得るという趣旨であつて、それはまことに高邁なる政治家的識見の言葉であり、吾人はかくの如き支配者を敗戦日本に送りたまつた事を神に感謝せざるを得ない」

小 括

ここまで石橋湛山と矢内原忠雄の諸活動および言論を見ることで、そこにある「共有された幻」の抽出に努めてきた。ここではキリスト教思想を焦点とした考察が行われたが、冒頭でも述べたように、キリスト教のみで両者における人格の多面性を捉えることは困難である。そこで(下)では、両者の日蓮観、日本人観で補足を行い、さらに美態に迫りたいと考える。

これまでのまとめとして、両者の関係を表に掲げておく。

(以下、次号に続く)

〔注〕

- (1) 河上徹太郎『日本のアウトサイダー』中央公論社、一九五九年、一九九頁。
 (2) 本書のなかで河上は、近代日本における九人の人物(中原中也、萩原朔太郎、三好達治、梶井基次郎、岩野泡鳴、河上肇、岡倉天心、大杉栄、内村鑑三)を検討の対象とし、日本におけるアウトサイダーの特異性を論じている。
 (3) 鹿野政直『近代日本思想史案内』岩波文庫、一九九九年、二八六頁。
 (22) 前掲『続余の尊敬する人物』一五六頁。
 (23) 前掲『矢内原忠雄伝』一九四頁。
 (24) 『矢内原忠雄全集』(第一五巻) 岩波書店、一九六五年、三九六、三九七頁。
 (25) 内村鑑三『非戦論』角川文庫、一九五三年を参照。
 (26) この経緯は『流風録』(『内村鑑三全集』(第三巻) 収載)に詳しい。
 (27) 『内村鑑三全集』(第一〇巻) 岩波書店、一九八一年、九頁。
 (28) 『内村鑑三全集』(第九巻) 岩波書店、一九八一年、七一頁。
 (29) 無教会史研究会編著『無教会史Ⅰ』新教出版社、一九九一年、二五六、二六五頁。
 (30) 前掲『続余の尊敬する人物』一六三頁。
 (31) 前掲『内村鑑三全集』(第一〇巻、二七四、二七五頁。
 (32) 無教会史研究会編著『無教会史Ⅱ』新教出版社、一九九三年、八六、八八頁。
 (33) 『矢内原忠雄全集』(第一八巻) 岩波書店、一九六五年、六一、六二頁。
 (34) 前掲『矢内原忠雄全集』(第一八巻、六五一、六五四頁。
 (35) 藤田若雄編著『内村鑑三を継承した人々(上) 敗戦の神義論』木鐸社、一九七七年、一七七頁。
 (36) 『矢内原忠雄全集』(第一九巻) 岩波書店、一九六四年、五一頁。
 (37) 前掲『矢内原忠雄全集』(第一九巻、二三三頁。
 (38) 前掲『矢内原忠雄全集』(第一九巻、二二三頁。
 (39) 前掲『矢内原忠雄全集』(第一九巻、二二九頁。